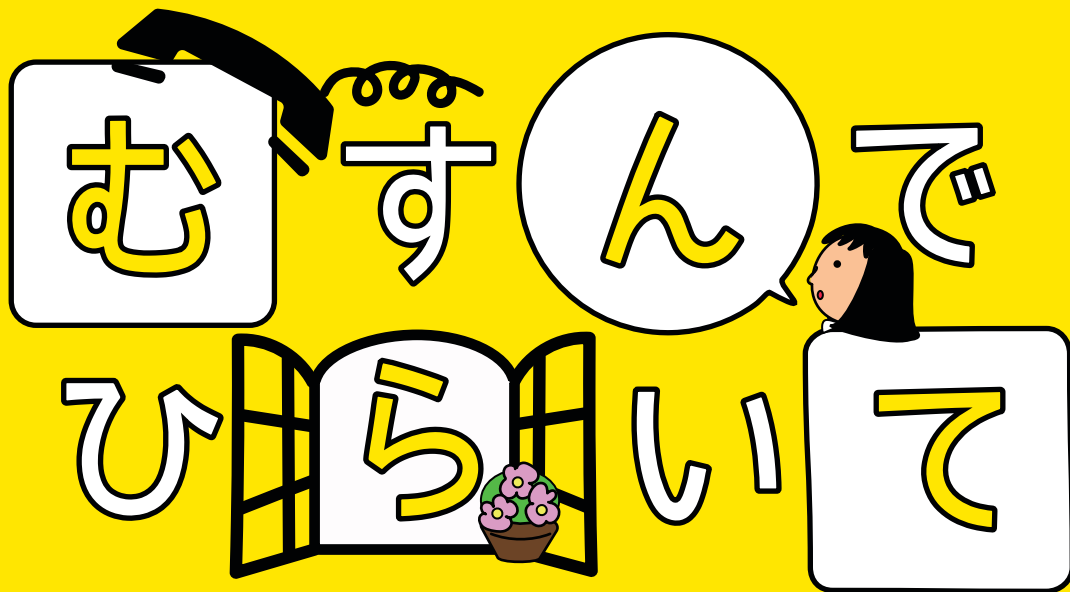


ねっとわあく

2020/3/18 Vol.74

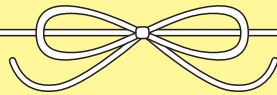


—あなたと共に在るために—

目次

- ② だんぼのススメーだんぼ楽会 ふくろうずー
- ⑤ 関係性を楽しむ～相手とどう向き合うのか～
- ⑦ 生き抜くためのソーシャルスキル
～コミュニケーションはいつでも学び直すことができる～
- ⑨ 私たちになにができるのか
県内の児童虐待相談件数から浮かび上がるもの
- ⑪ 「あなたの一言に救われる人がいる」
児童虐待、わたしたちにできること
- ⑬ あなたも経験したこと、ありませんか？
- ⑭ ひとりで悩まないで相談しよう

むすんで ひらいて ～あなたと共に在るために～



2019年12月、ジャーナリストの伊藤詩織さんが、性的暴行を受け、損害賠償を求めた裁判で勝訴したニュースが流れた。合意のない性行為や、性暴力で辛い体験をした女性は多い。にもかかわらず、公にして被害を訴えたり裁判で戦ったりする女性は少ない。困難に立ち向かいながら、被害に遭ったことを顔や名前を出し、メディアで訴え、裁判で戦っている彼女の勇気、行動を心から称える。彼女の行為は「#MeToo」「#KuToo」、フラワーデモ（注）といった、女性が立ち上がり権利を訴える運動へ多くの人の関心を向け、行動を促すことにつながっていると言えるのではないか。

人間は一人では生きていけない。誰かしらと何らかの関係をもちながら生活をしている。

人と人との間の関係は様々で、良好な関係もあれば、陰悪な、暴力を介しての関係もある。尊重し合える関係もあれば、断ち切らなければならない関係もあるだろう。

実際、あなたは、目の前の相手と対等な関係を築けているか、考えたことがあるだろうか。

今号では、人と人との間にある様々な関係や繋がりについて取り上げた。

男性保育士とその同僚や保護者、バイク店経営者と客であるバイクオーナー、発達が気になる子とその周りの大人や支援者の関係や繋がりを参考に、どんなコミュニケーションから良好な関係が築けるのか考えてみたい。

そして、児童虐待、DVに関する記事では、虐待や暴力からの支援を必要としている人との関わり方や、虐待や暴力をなくすために、あなた自身ができること、周りの人や地域が支援できることについて考えてみたい。

今号が、あなたが誰かと共に在るために、あなたと周りの人との関係、社会との関わりを改めて考えるきっかけになれば、と思う。そして、それが、全ての人のエンパワメントに繋がっていくことを願う。

（注）#MeToo…「私も」にハッシュタグ（#）を付けたSNS用語。性的暴行などの被害体験を告発する運動。

#KuToo…職場でのハイヒール強制に反対する署名活動 「#MeToo」になぞらえ「くーつー」と呼ばれ、靴と苦痛をかけている。
フラワーデモ…花を持って、性暴力撲滅を訴える運動。

プチ
バトル

●あなたと、あなたの身近な人（家族やパートナーなど）との間で起きた「プチバトル」を教えてください。
➔プチバトルが起きた時の「仲直りの方法」を教えてください。

※静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」でアンケートを実施した際に寄せられた回答の一部を掲載
（アンケート実施期間：2019年10月～2020年1月）

だんぼのススメ

—だんぼ楽会 ふくろうず—



▲左から、丸井ゆうじさん、安間わたるさん、中根よしひろさん、三瓶たかしさん

男性保育士。略して「だんぼ」——

1999年、男女雇用機会均等法が見直され、同年4月の児童福祉法施行令の改正により「保母」という名称が、男女どちらの職としても認識されやすい「保育士」に変わった。

「学生時代にニュースで知り、男性でもなれる『保育士』という仕事ができただ、と感銘を受けました。」

そう語るのは、メンバーの丸井ゆうじさん。「だんぼ楽会ふくろうず」は、メンバー4人全員が保育現場に15年以上携わり、そこで得た経験を生かしたあそびうたのパフォーマンスを行っている。男性保育士という新たな道を切り拓いてきた彼らと、同僚や子どもたち、保護者との関わりを通して、男女共同参画を考えていく。

イメージと現実とのギャップ

二瓶 僕たちが保育士を目指していた20年ほど前は、男性保育士という存在が今より浸透していなかった時代で、「男性だから」という理由で試験や面接が受けられないことがありました。

中根 求人募集の情報誌で調べて、片っ端から電話をかけましたが、「男女とも募集と書いてあるが、そう書かないと男女雇用機会均等法に触れるから載せているだけ」と何件も断られました。

丸井 僕は、面接で園長に履歴書を渡したら「男性は採用しない」と断られたことがあります。

安間 みんなそれぞれ、採用された入り口は、「男性だから力持ち」「ダイナミックな遊びをしてくれそう」というところだったと思います。でも、働いていくうちに「男性だから」「女性だから」ということは関係なく、「自分だったらどうするか」を考えるようになりました。

中根 僕が今勤めている法人は、面接のときに「男性を採用したかった」と言ってくれました。それでも女性が多い職場だから、と身構えていましたが、性別関係なく対等に関わってくれました。働きだした当初は、女性

プチバトル

- 次男の部屋が汚い。私「いい加減掃除しろ！」次男「わかってるわ！」無言のバトル。
- 次男の好きなメロンパンを買っておく。(ペンネーム:おかみちゃん)

保育士から「男性だから」と言われることもありましたが、決してネガティブな意味ではなく、例えば、母子家庭のお子さんのお父さん代わりにされる、といったように、活躍できそうなきつかけを作るためのものでした。そこからコミュニケーションをとって、子どもたちや、その家族と信頼関係を早く築けるようにサポートしてくれました。

丸井 働き始めた頃、クラスと一緒に担当していた先生が、歌もピアノもとても上手でした。真似したくてもうまくいかず、「自分は保育士に向いてない」と悩んだ時期がありました。あるとき、園の用務員さんに、畑仕事の手伝いをさせてもらいました。僕は生きものが好きで、農作業中に見つけた虫を捕まえました。その虫を子どもたちと一緒に世話をいくうちに、「自分が苦手なことにも固執しなくても、虫を通して子どもたちとコミュニケーションがとれる」ということに気づきました。「僕なりのやり方で、自分らしくやればいいんだ」と安心しました。

若い世代の男性保育士と比べて

二瓶 若い世代は、男性も保育士として働きやすくなっている

と思います。僕が初めて勤めた幼稚園では、僕が男性で初めての幼稚園教諭だったので、「雇う側もどのように働いてもらうべきか、手探りなところがあつたと思います。」

丸井 ふくろうのような活動を「いいですね!」とは言ってくれ、自分の時間を削ってやるか、というところではないようです。働き方改革によって、遅くまで残業をしないように配慮されていて良い風潮だと思えますが、それによってきた時間を、自分をより成長させるための時間にしてもいいのでは、と思います。

安間 若い男性保育士は注意されたり、指導を受けたりすること



あそびうたを通して親子でふれあう

に慣れていないように感じます。どちらも「怒られた」という意識が強くなってしまふのかな。それはこちらも伝え方を工夫していく必要があると思います。

丸井 男性保育士が増えてきているものの、それと同時に保育園や子ども園も増えているので、まだまだ少数です。女性ばかりの環境で、うまくコミュニケーションがとれないのか、3年ほどで辞めてしまう人が多いように感じます。もっとギブアンドテイクの精神で、できないことは周りを頼って、できることはとんとん突き詰めてみる。全てを一人でやる必要はありません。出来上がったものが一人で徹夜や残業ばかりしてどうにか作ったものよりも、周りとの協力して作ったものの方がずっと良いと思います。**中根** もちろん、僕たちが今日まで続けてこられたのは、一緒に働く先生方に恵まれていたことも理由のひとつですが、困ったり悩んだりしたときに相談できるような人間関係を作ってきたからだとも思います。職員全員と仲良くなるのが理想的ですが、現実的にはとても難しい事です。だからこそ、何かあつたとき協力してもらえるように、日頃からコミュニケーションをとり、信頼関係を築いていくことが大切です。

働く中でのコミュニケーションのツツ

安間 人それぞれ個性があります。僕は、それをきつかけにしています。例えば、ペアを組んだ先生が関心のある保育の分野について自分も学んで、相談してみよう。何か糸口を見つけてアプローチすることで、厳しいと感じていた先生でも笑顔で会話できるようになりました。

中根 雑な返事、くだけすぎた言葉遣いは、周りの先生を始め、子どもたちも、その保護者も聞いています。返事ひとつ、受け答えひとつで自分に対する周りの評価が変わると思います。保護者の中には、男性保育士に対して好意的に捉えてくれる人もいれば、不安を感じる人もいます。そういう人には、とにかく子どもの話をするようにしています。何か少しでも伝えられることが増えるように、その日の様子を覚えておくようにします。**丸井** 保育士のいいところは、どんなに苦手な保護者でも、子どもたちを通して関係が作れるところだと思います。ひとりひとりの子どもとしっかりコミュニケーションをとつていけば、家に帰ってから園のことを話してくれます。子どもが先生が好き」と言ってくれれば、保護者も自ずと信頼してくれます。

プチバトル

●実母とのプチバトル。

→1週間音信不通の上、寅さんのように現れる。大体普通に戻るO型一家。(ペンネーム:ちゃりんこや)

ふくろうずの活動について

安間 最初は、袋井市の子育て支援センターで、僕一人で始めました。そのときは短い時間で、童謡やポップスを一緒に歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたりしていました。普段保育園でやっていることの延長のようでありながらも、保育園ではできないことをしていました。それから二瓶さんが手伝いをしてくれるようになりました。二人になると、僕がギターを演奏する。それに合わせて、親子でふれあい遊びを楽しむ参加型のスタイルが生まれました。それを何年か続けていた頃、「AI あそびうたグランプリ」という大会に出場したことがきっかけで、僕のオリジナルのあそびうたが本に掲載されることになりました。それで僕たちを知ってくれた幼稚園や保育園から、公演依頼が来るようになりました。それから一人、二人とメンバーが増え、四人になって、今では年間で30カ所ほど公演をするようになりました。

丸井 最近は、研修の講師をさせてもらう機会が増えて、受講した先生が依頼をくれることもあります。

安間 僕たちはプロではないので、決して演奏や歌が上手なわけはありません。ですが、子どもたちのことや現場で培ったノウハウを知っているので、子どもたちに響くものを作ることができていると思います。

園児、保護者、そして一緒に働く女性保育士。それぞれにきちんと向き合い、丁寧に関係を作っていく様子が、彼らの話から見て取れた。それは、保育士に限らずどんな職業でも、どんな人でも実践できるものだ。

そして、性別という壁にぶつかった先にあったのは、「自分らしくあること」であった。のびのびと、楽しそうに歌う彼らのパフォーマンスを見て、子どもたちの「自分らしく」が当たり前前に認められるような男女共同参画社会になっていってほしい。

(白木 菜々美)



オリジナルソング「アメリカザリガニ」を披露



安間さんが作ったあそびうたが掲載されている『中川ひろたかの AI あそびうたランド』



プチバトル

- 家族の予定共有にスマホアプリを利用しているが、夫は「〇日、飲み会だから」と口頭で言ってくる。なんのためのアプリだと思っているんだ! (怒)
- 毎週日曜日、お互いの1週間の予定を確認するようにした。予定を共有できるようになり、言った言わないのストレスがなくなった。(ペンネーム:ゴリラ家)